

## 「みる」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

### 1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2021年1月19日)の授業にオンラインゲストティーチャーとしてご参加いただいた三田地真実氏(星槎大学大学院教授)の講演内容を荒井・三田地によって再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生に尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

### 2. ゲストティーチャー「三田地真実氏」の話

#### (1) ゲストティーチャー自己紹介

【三田地】三田地と申します。事前に「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ～他者を理解すること」という私の論文(三田地, 2019)を皆さんがすごく真摯に読んでくださったことが伝わってきました。非常に感謝しています。ありがとうございます。実は皆さんとは初めましてではなく、青木マーキーさんがいらしてる時に私も参加していました。私もファシリテーターが一つの生業でもあります。また青木さんとは場の作り方が違うと思うので、ファシリテーターという観点からも今回の授業を味わっていただければと思います。

今回のテーマは「見る」ということですが、家族を含めた他者をどうやって見るか、自分の目の前に現れた人を、見ても本

当に見えているのかという風に捉えながら今日のテーマを設定していただければと思っています。私の一つの実践なので、これが全てとは言いませんが、10年ぐらいやってきたこのような実践をまとめたものを皆さんに読んでいただいたということです。

簡単に私の自己紹介をします。三田地と申しますが、元々教員を特別支援学級学校で短い間やっていました。しかし勉強が足りないと思いました。これは少し情けない話ですが、私は大学で教員免許を3つ取って学校現場で教員として立ったのに、全然何もできないではないかという凄い驚きがありました。自動車免許で外に出るより酷いと思いました。それで勉強しないとちゃんとした教育はできないのではないかと思います。大学院に入り直しました。

その後また縁があり、私の専門は言語障

害でしたので埼玉医科大学という医療の現場で仕事をしました。そしてまた縁があり、アメリカのオレゴン大学に行きました。この大学が行動分析学というもう一つの柱のメッカの大学でした。そこで勉強し帰ってきて今に至ります。

今年度は行動分析学とファシリテーションという私の2つの軸と、言語コミュニケーションの専門家として組み立てたオンライン授業の研修で一杯でした。500人以上の大学の先生方を対象に研修してきました。

今日の授業では、目の前に現れた他者を見るという時にどういうことが実際に起きていて、それをどのように解決できるかということを行動分析学の視点から皆さんにヒントをお伝えしたいと思います。

このライフヒストリー曼荼羅ワークショップのフレームをお話ししてから、皆さんの質問に答えてきたいと思います。論文にもある”There is a story”「人に物語あり」という言葉はアーサーフランクさんの言葉であり、非常に共感しました。私も皆さんもここに至るには色々なストーリー、すなわちヒストリーを経ています。調べると”His story”と”History”は語源的には一緒なのです。

このように誰もがストーリーを持ち、誰もがこの流れには逆らえません。これはある意味フェアだと思っています。お金を積み重ねれば死から免れられるわけではありません。

ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ自体は、「相手のストーリーを聴き理解する」ということを目的として作りました。その材料として、まず各自が自分の人生を書き出すのであって、実は後半の小グループになってお互いのストーリーを聴き理解する

ということに比重がかかっていました。

(薄ピンク色の画像を指して) これは何色でしょうか。これは「聴色」といいます。皆さんに今日はこの「聴く」をキーワードに覚えておいてほしいと思います。「聴す」と書いて何と読むかをご存じですか。これは「ゆるす」と読むそうです。そして、聴くとは、つまりは、「相手に話すスペースをゆるす」ということだそうです。私が多くの保護者の方とかに信頼できる専門家はどんな人でしょうかと尋ねたときに返ってきた答えは「話を聴いてくれる人」でした。そこにもヒントを得てこの「聴く」をキーワードにワークショップを展開するようになりました。

## (2) 論文の内容について

【学生】「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」について、自分自身が行ったことがないので、これを行うことで他者の行動の意味を理解できるという実感が湧きません。人の行動はそれほどまでに歴史によって作用されるのでしょうか。

【三田地】このワークショップ自体は、後付けではありましたが、私の専門とする行動分析学を学んでいただくことを狙いとしていました。その行動分析学のエッセンスがまさにこの歴史によって左右されるということなのです。ここで皆さんに質問です。皆さんは日本語を話すことを選んで生まれてきたのでしょうか。なぜ日本語を喋っているのでしょうか。ではこの中で、私がお阪で育ったということに気付いた方は、いらっしゃいますか。ではなぜ私は今このように東

京弁で話しているのでしょうか。大阪にいた時は大阪弁でした。小学4年生の時に東京に引っ越しました。その頃は自分が大阪弁を話していると気づかない年代なのです。東京で喋ったら変な言葉を喋っていると笑われました。皆さんが方言を友達に話して笑われたらどうしますか。その時の私は母親に、大阪に帰りたいと泣きつきました。しかし母親は「ああ、そうね」程度の反応でした。この対応は行動分析的に正しかったのです。母親が私の行動に過剰に反応しなかったことで、私が「大阪に帰りたい」と訴える行動はなくなり、次に自分の言葉は何がみんなの言葉と違うのかと考え始めました。モデリングが始まったのです。そして、今のように東京弁で話せるようになりました。大阪弁を話す、東京弁で話すということは環境で変化したということです。同じように皆さんも英語を話す人しか周りにいなかったら、日本語で話し続けますか。その他色々な作法も同じです。例えば食事の時、左手は下におろしていてもいいと言われて育ちましたか。日本ではこの動作は礼儀が悪いこととされることが多いと思います。しかし、こういう振る舞いは国によって何が良いとされるかどうかが違います。自分と違う行動パターンの人を見ると苛立ちを感じるがあると思いますが、その時にどうしてああいう行動をするのだろう、どういう環境だったのかなという視点を持てるかどうかで随分変わります。人のある行動だけを見て瞬時に「良い悪い」を判断しない、そういうステップを踏めるようにこのワークショップを行うことでなればと思います。

今、皆さんが行っている行動は、生まれて

から様々な周りの環境との相互作用で身に付いています。なぜ日本語を話しているかといえば、赤ちゃんの頃に自分が発した日本語らしい発音に周りが反応して、私達は英語ではなく、日本語を獲得したのです。このような視点を忘れてしまっていないかということをお伝えしたいのです。

【学生】実際にワークを行い、良かったことや大変だったことなどを教えてください。

【三田地】まず人を見てすぐに「〇〇な人だ」と決めつけないということです。この人はこれだからダメではなくて、どうしてこうしているのかなと考える余裕を持つということをも自分も学びました。

また私の大学の授業でこのワークショップを紹介し、その後学生さんが実際に、自分の家族や恋人と行ってくれた場合があります。それまで知らなかった相手のことを知れて良かったということもあります。一方でライフヒストリーは様々な理由で触れられたくない方もいます。だからそういう方の場合、無理をして行うのはよくないと思っています。

ですから、このワークショップを行うにあたっては、行ってみたいという参加者を募って行うのがよいと思っています。そして、安心して安全な場を確保するための様々なセーフティーネットを準備しておくことが大事です。これはこのワークショップに限った話ではありません。例えば、私は大人の方を対象にワークショップを行っていたので、やりたくないとかやるのが辛いと参加者の方が言えるスペースを作っていました。

しかしもし学校の先生が子どもたちを対象に実施するとなると、先生がいいからやろうよという子どもたちは我慢してやってしまう可能性があります。特に小学校の先生は子どもたちに対して圧倒的なパワーを持っています。ですから自分の振る舞いがどのぐらい相手に影響を与えるかということや常によりフィードバックしながら行うことが大事だと思います。皆さんは何かやろうとしていることが、一体どこまで大丈夫かどこまでリスクがあるかということは常に考えてやってみてください。

【学生】「1つの行動だけで人間を語ることはできない」というニュアンスであったと認識していますが、逆に「1つの行動が人生を物語っている」という考えもあるかと思えます。こうした考え方はどのように捉えられますか。

【三田地】一事が万事ということですね。もう少し補足していただけますか。

【学生】人間は中身が大事という考え方には私も賛成ですが、見た目が100%という考え方もあります。そういった考え方についてどのように考えておられるか、お聞きしたいです。

【三田地】1つの行動にその人らしさが凝縮されているなど感じることはあります。小さなことですが、私が本当に困っていたときにそっと手を差し伸べてくれた人がいて、その人は他の場面でも周りにさりげなく気を遣っていました。しかし、同じ場面で違う人に、自分にとっては的外れなことを

されたこともあります。その後関係が今でも続いているのは前者の方です。

今回のワークショップで言いたいことは、1つの行動でその人をいい人か悪い人かと決めつけないということです。その人のどの面に着目してしまうのかということも私たちの方の見方で決まってしまうですね。

「リーダーズインテグレーション」というワークショップがあります。このプログラムは新しいリーダーを迎えたときに、早く組織をチームとしてうまく機能させるために開発されたものです。具体的には、そのリーダーを他のメンバーがどう見ているか、意見を出し合うというものです。リーダーを変えてほしいところや、リーダーのいいところについて、リーダー以外のメンバーで自由に意見を出します。こういうときに外部のファシリテーターが入る方がいいですね。出された意見はホワイトボードなどに記録しておきます。誰が何を言ったかについては記録せず意見だけを書きます。それが一段落したら、メンバーがその部屋から退室し、次にリーダーが入ってきてホワイトボードに書かれたメンバーからの意見を読みます。それに対してリーダーからメンバーにフィードバックを行うというのがざっとした流れです。最初に本音を出し合ってから、そこからチームが同じ方向を向けるように調節するのです。

日本の学校でもこれを年度初めに行ったらいいのではないかと思います。以前ある小学校で実施する予定を組みましたが、直前で校長先生からキャンセルの連絡を受けました。おそらく、皆さんの意見を聞くのが怖いのだろうと思いました。

【学生】論文では若年層の方が「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」を楽しみながら行っているという印象を受けました。「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」を行うにあたって、楽しむことはやはり重要なのでしょうか。

【三田地】これについては先程話した通り、このワークショップに興味を持っている方に参加していただく方がいいかなと思います。あまり強要するとよくないですし、どうやって参加者を募集するかが大事だと思います。

ここでの「若年層」というのは、19歳から22歳ぐらいの皆さんぐらいの年齢です。最初にこのワークショップ行ったのは30代以上の教員の方だったので、学部生さんにとって人生を振り返るのは早いかなと思っていました。しかし非常勤先の自分の担当した授業でこのワークショップのことを紹介したら、就職のエントリーシートのために人生を振り返るため、このフォームでもやりたいという声が上がりました。それで実施してみたのですが、このように学生さんと相談した上でやってみたら反応は良かったということです。ワークショップ後の感想の中には、友だちと飲んだりしながら話すことはあっても、まとまってその人の人生を全部聴くということにはなかったというものがありました。

### (3) ライフヒストリー曼荼羅ワークショップの目的

【三田地】ワークショップの目的は、「1. 自分の人生の振り返り」、「2. 自分の人生のキ

ーワードの発見」、「3. 目の前の人にも固有の物語があることを知る」ということです。3は特に大事にしています。またこのワークショップを世の中の人全員にやってもらうことは難しいので、目的の「4. 今後、人に出会い、話をするときには『この人にも長いライフヒストリーがあって、今の状態にあるのだ』という現在の状態をその人に視点で見直すことができること」を大事にしてほしいです。その裏の意図は誰かのことをすぐに決めつけない、瞬時に判断しないということです。

特に学問を究めようとしていると、分析ばかりしてしまいます。先程、「聴す」で「ゆるす」という話をしましたが、ありのままを見るとも言えると思うのです。誰でも分析されて見られるより、ありのまま見てもらいたいから、『アナと雪の女王』の映画や歌がヒットしたのかなとも思います。私も自分の本『保護者と先生のための応用行動分析ハンドブック』の副題に「子どもの行動をありのままに観るために」と付けました。

皆さんも、信大生ならこう、女子ならこうと言われたらどうですか。私は時々アメリカ帰りだからねと言われます。行く前と変わらないのにこう言われると、私のことを分かってくれていないなあと思います。これをステレオタイプな見方と言いますよね。誰もがステレオタイプで見られたくないと思います。繰り返しになりますが、人に安易なレッテル貼りをしないということにつながればなと思っています。

教育の例を出すと、子どもが問題行動を起こす時には、ちゃんとヒストリーがあるので。障害があるから問題行動を起こしているという短絡的な見方はしないで欲しい

いなと思っています。

#### (4) ワークショップの流れについて

【三田地】今皆さんにワークショップを行ってもらっているとします。まずライフヒストリーを書いてもらうときのインストラクションとして、「これは自己開示セッションではないです」ということと、「自分が言いたくないことは書かなくていいです」ということを伝えます。これがファシリテーターとして大事なことです。各人が何をヒストリーとして書くかはこのインストラクションで決まってくるからです。

曼荼羅ファームの4事象を使って起承転結のように転換点を書いていきます。年表を使用すると、年齢によって人生の長さに差があるように見えてしまいがちですが、この曼荼羅フォームを使用することでどの人も1枚で示せるので、人生が等価であることが示せます。

個人作業で自分の人生を振り返りながらの曼荼羅フォームへの書き込みが終わったら、次には4人ぐらいの小グループになってもらいます。このグループワークをするときに何人で組むかは結構大事なポイントになります。私も色々試行錯誤した結果4人組に落ち着きました。他の人の人生を6人分聴くことは集中力が続かなかつたりする可能性があります。2人組ですと自分と相手のヒストリーになってしまうので、もう少しバラエティーを持たせるために最低3人組ですね。4人になると自分が話してあと3人分を聴くということである程度の多様性が見えると思います。

話を聴く際に重要なことは、「100%その

方のために生きるつもりで聞いてください」というインストラクションです。このインストラクションを私がすっかり忘れてしまった回のアンケートに、「自分の人生を軽く扱われたようで非常に傷ついた」というものがあり、以来先のインストラクションを非常に大事にしています。要するに人のヒストリーを伺うときに、話半分に聞かないっていいことですね。また相手の話を聴いて心に残ったキーワードを小さめの付箋に書いて渡し合うということを行うこともあります。さらに、話している人の話に割り込まないことも大切です。普通の会話では頻繁にやり取りをしますが、ここではヒストリーを話す人はそれを最後まで話しきってもらいます。聴き終わったら聞き手が質問をするという時間を取ります。

一人で静かに振り返る、考える時間を合間に取るようにしています。急いで次に行くことはしません。この流れはアレンジしていただいて構いませんが、人の話を聴いて色々思うことを振り返ってから、それをみんなで共有したりそしてまた振り返ったりします。このような流れで行い、最後に自分の中に沸き起こる心の声と向き合うことがとても大事です。これを私のファシリテーションの本では「自分の内なるプロセスを見る」と表現しています。今も皆さんの中に色々な声が沸き起っていますよね。その自分の中で起きている感情を見るひとつの練習の時間でもあります。

#### (5) 自分が本ワークショップを実践するときに注意すべきこと

【学生】自分を表現することが苦手で、不完

## 「みる」を問い直す

全な発表で誤った認識を聞き手に与えてしまった時に、このワークショップ自体が話し手への「レッテル貼り」を促進してしまうということになりかねないと思うのですが、いかがでしょうか。ここでの不完全な発表とは、個人で書く時間が20分ぐらいと決められているため書ききれず途中で終わってしまう人がいても、時間の進行上進まなければいけないため自分で納得できない状態を指します。その発表を聞くことで、周りの人にとってはその情報しかないので、結局その人をその情報だけで見ることになってしまうのではないかと思います。また相手のことを知ろうという企画の中で行うと、余計にこの人はこういう人なのだと強く印象に残るため、レッテル貼りが強くなってしまっているのではないかと考えました。そういうリスクはどうすればいいのでしょうか。

【三田地】とても深い質問ですね。大前提として、私は、私たちは基本分かり合えないと思っています。何度伝えてもおそらく本当のところを伝えるということはなかなか難しいことです。自然科学的な話であってもずれるのです。ですから最初にインストラクションとして「ここで語られることがその人のすべてではありません」というのを入れてもいいと思います。

私も今、皆さんに自分がどう思われているか、ちゃんと伝わっているかと気にしています。しかし話をしないと前に進めないというせめぎ合いで、私たちは普段生きているのかなと思います。

【学生】私たちは無意識に人に対してレッテル貼りをしていたりステレオタイプを用

いたりしてしまっているのだと思います。しかし三田地先生が「これがすべてではない」とおっしゃってくださっていたように、その人を知るきっかけになったらいいのかなと思います。次は違う話をしてみたり、違う一面を探してみたり、色々な側面から人を知ろうということが大事なのではないかと考えました。

【学生】この「レッテル貼り」を促進しないようにどのような対策が可能かというところまでは考えられておらず、自分が実践するとなったら難しいと感じていました。しかし今お話を聴いていて、これが全てではないということファシリテーターが伝えるということをしていこうと思いました。

【三田地】自分がいいと思っているワークショップのことは時に見えない部分があるので、この「レッテル貼りを促進する可能性」ということは今回私が気付かせて頂いた部分ですね。もしかするとレッテル貼りやステレオタイプに気づくということが本当の目的なのかなと思います。またレッテル貼りしている自分に気づくといいのかなと思います。

このレッテル貼りが色々なことのトラブルになっているのかもしれないですね。

【学生】人生を公表した結果、他の人の人生と比べてしまったり自分の人生が薄いのではないかと不安になってしまったりする参加者はいないのでしょうか。またそのような参加者にはどのようなフォローをするべきか、ご意見をお聞かせください。

【三田地】もう少し補足していただいてもよろしいでしょうか。

【学生】先程は相手に対して「レッテル貼り」をしてしまうということに関してだっと思いましたが、逆に自分を他人と比べてしまって落ち込んでしまう人がいるのではないかと考えました。そのような人に対してどういった対処があるのかお聞きしたくて質問しました。

【三田地】過去の参加者で、私の人生なんてたいしたことないですとおっしゃる方も実際いらっしゃいましたが、その方は自由参加ではなく、職場の研修の一環として参加された方はあまり積極的に参加されていた立ち場ではありませんでした。比べないということも大事だと思います。これは比べることで自分にレッテル貼りをしてしまっていますね。私ももちろん人と比べてしまっていますが、人と比べてもこの体からは出ていきません。可能ならこのワークショップは自由参加の方がいいというのはこの問題も関わってくるからです。

日本人は学歴などすぐに比べてしまう習慣があるので、比べないことは難しいと思います。しかしワークショップを行ってみて、自分の人生と他の人の人生に重なり合い見つけることができたと聞きました。ただしファシリテーターとして、ワークショップの最中の言葉遣いには非常に気を使います。こういう場合、あとから動画を見直すことも大事かもしれません。

【学生】「他者を理解する」とありましたが、自己開示をした後に、周りの人がどのよう

な反応をするのいいのでしょうか。先程「100%その人のために生きる」とうことで、聞くことをとても大事にしなければいけないと分かりましたが、理想的な聞き方や受け止め方にはどのような形があるのかお聞きしたくて質問させていただきました。

【三田地】今までのところ聞いてみてどうでしょうか。

【学生】話す人が話しやすいように、傾聴することが一番大事なかなと思います。うなずきながら聞くなど、その人が話しやすい環境にすることが大事なのかなと思います。

【三田地】「100%その人のために生きる」ということは、言い換えれば、マインドフルネスということです。

私たちは人の話を聴きながらすぐに違うことを考えてしまいます。今も私の話を聴きながら、ランチのことを考えていたら違うことを考えているということです。そうではなく今自分が意識しているところを、目の前の人だけの所に持っていく、すなわち英語で言う“awareness”です。皆さんが上の空で何かしている時はマインドフルネスではない状態なのです。

マインドフルネスを別の言い方で言うと「今ここにちゃんといる」ということです。私たちは今ここにいないことがよくあるので、今ここにちゃんといましょう。今ここにちゃんといて聞いていると、相手も分かって聞いてくれていると理解します。そして話し手が聞き手の話を理解することよりもちゃんと聞いてくれていることの方が、相手にとってはありがたいことのように思い



ます。

【学生】親子関係や夫婦関係を見つめなおすためにも「曼荼羅フォーム」(注：ワークショップで用いるワークシートのこと)は有効だと感じましたが、身内で行う際に気を付けるべき点を教えてください。

【三田地】この曼荼羅ワークショップを、知らない人同士で行うか知っている人同士で行うかは考えなければいけない点です。例えば、この授業のメンバーでやるとしたら、この後のお付き合いがそれに続きますよね。このように知っている人たちと、もうその時だけで二度と会わない人たちで考えると、どちらが自分の言いたくないことをさらけ出せるかという、意外と後者の方が言いやすい場合があります。場づくりをする際のポイントでもありますね。ワークショップのあとに人間関係が続くか続かないかでインストラクションが変わります。

基本的に、身内の人と行ってもらった場合は授業という名目で行ってもらいました。身内に自分のことを喋ることは勇気がいることなのです。そのため、身内に協力してもらえるように授業の課題なので協力してほしいという文脈を伝えてもらいました。身内の方が違和感を抱かないようなインストラクションを考えていました。

【学生】他者を理解するための活動ということでしたが、話し合う相手によって効果が異なりそうだなと感じました。関係性が薄い人にプライベートのことを隠さず話す人は少ないと思いますが、その場でも上手く話し合いをすることができるものなので

しょうか。

【三田地】関係性が薄い方が話せる場合もあるのです。その集まっている人がどういう形で集まっているかによります。こういうワークショップがあるので来てくださいますよ、例えば、そこに集まる皆さんはそのワークショップをやるつもりで来ていますよね。そういうつもりで来ているのか、例えば心理学の講義の途中で突然このワークショップが始まるのかでは全然違うわけです。ここに来るまでのプロセスによってこのワークショップをどう位置づけ、どう展開していくかを考えるのがファシリテーターの役目です。色々な場があるので難しいですが、参加者がどのようにして集まっているかはすごく大事です。

## (6) 海外での実践について

【学生】海外で初めてワークショップを行うことになった経緯を教えてください。

【三田地】やはり日本の中だけではなく、海外の人はこのワークショップをどう受け取るだろうかと思い、海外でこれに関連できそうな学会で、学会発表ではなくワークショップの枠でやりました。ダイアロジカルセルフ(対話的自己)という学会です。「対話的自己」とは、皆さんの中にある様々な自分が葛藤場面で対話を示している様子を指しています。例えば、コロナ禍の帰省は、「子供」としての自己は帰りたいが、一「社会人ある意味大人」としては帰省していいのかどうかと葛藤したと思います。そういうイメージです。その対話的自己という学

会で、自己との対話にこの曼荼羅フォームを位置づけて行ってみました。インターナショナルな学会でしたのでヨーロッパ各地から参加者がいました。

【学生】各国の参加者から「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」を開催したいという声が聞こえてくるという部分がありましたが、各国でプラスの要素が加わったり、逆に削られたり、違うタイプが出てきたりするなど面白い発展を遂げているのでしょうか。

【三田地】これについては、私は分かりません。次の学会で偶然前回の学会で私のワークショップに参加したアメリカ人とランチで隣になったときに、「自分の国でやっています」と言われて、私のワークショップが続いていることを知りました。

私はこのワークショップに関してはコピーライトをかけていません。仏教のようによいものは広めていこうという「ブッダ方式」です。使いたい人が自由に使えるように論文を書いたという意味もあります。皆さんも使ってみてください。

【学生】「異文化間交流」としてのワークショップは行ったことはありますか。

【三田地】まだ異文化間交流としてはやったことがないので、もし皆さんにこのような機会があったらやってみてください。また異文化は国際だけとは限りませんが、ここでの異文化は国際という意味ですか。

【学生】例えば、交流会で海外の人と日本人

で英語を用いてこのワークショップを行うことや、日本語を学びに来ている留学生と日本語でこのワークショップを行うことも可能なのかなと思い質問しました。

【三田地】私は日本国内でも異文化があると思います。例えば東京と大阪も異文化です。私は大阪から東京に引っ越しましたが、異文化交流したと思っています。結婚も大異文化間交流大会です。皆さん結婚する前は趣味が同じかどうかではなく嫌いなところが同じなのを選ぶのがコツですよ。これは大事なことで、逆転の発想なのです。相手に合わせるばかりではだめですよ。嫌なところも見せるのです。それでも良いと言ってくれる人がいいです。皆さん、最初にいいところを相手に見せて、あとで無理がたたるのです。

【学生】国際紛争は宗教的な観点から言えば2000年以上の歴史があり、1日や2日で解決できるような問題ではないと聞いたことがあります。曼荼羅ワークショップでこの問題にどれほど切り込むことができるかと考えていますか。

【三田地】イスラムでなぜあれほど揉めているのかに対して、私は簡単に意見を言えないですね。非常に長い歴史があるのですが、それを理解するには歴史を理解しなければいけないですし、対話しないと難しいと思います。本当はやってみたいですが難しいと思います。国際的でなくても、例えば揉めている2人の間に入って、一歩下がって相手の歴史を聞いてみましょうよということができたらいい

などと思います。

【学生】私は「異文化交流」を考える授業を前期に履修しました。その授業で、イスラムやパレスチナの紛争の歴史が 2000 年以上あることや、簡単に解決できる問題ではないため日本人のように外部の人が口出しはできないことを聞きました。紛争しているからには解決したいと思うので、解決の糸口はどこかに見られるのかなと思いました。

【三田地】そう願って動いていくしかないと思っています。国際紛争の解決に私が出て行くチャンスがあるかは分かりませんが、発信をしていくことは大事かなと思います。自分ができることで発信して、小さくても国際学会で広めていくことも自分としての実践だと思ってやっています。

今年のコロナ禍で、1人が行動を変えるとこれだけやれるということを目撃したと思います。最後はやはり一人一人の行動だと思っているので、それにはアクションを起こしていくしかないかなと思います。頑張ってください。

#### (7) 教育現場で実践する際の配慮点

【学生】教育の場に拡張する際、気を付けなければいけない点はどのようなことでしょうか。

【三田地】教育現場で行うとしたらということで、既にお答えしているかもしれませんが、これは年齢とかなよむと思います。皆さんがお迎えしている生徒さん達の状況を見て対応を考えていただければと思います。

【学生】小中学生にとって、人生を振り返ることはまだ難しいでしょうか。

【三田地】私も小学校 6 年生にワークショップを行ってもらったことがあります。彼らにとっては難しいかなと思いました。引用論文で小学校 6 年生の実践がありますが、実際のインストラクションがどのように行われたのかを確認しないと、どのようにフォームが使われていたか本当のところは分かりません。中学生はどうでしょうね。試していないと分からないと思いますので、是非ワークショップを行ったらどうだったか教えてください。

【学生】論文では、ライフヒストリー曼荼羅を使用した様々な実践例が紹介されていましたが、学校の授業において中学生を対象として実施する場合、教員として心がける点はあるのでしょうか。

【三田地】何を目的に中学生に実践するかですね。中学生のキャリア教育の中で年表を書く例なども見ているので、どう兼ね合わせるのかですね。何を目的でワークショップを行うかで左右されると思います。

子どもたちには人生ではなくて小学校 1 年生から 6 年生までの思い出を書き出してみようということも可能だと思います。テーマを絞るということですね。大人でも人生、例えば、ファシリテーターに関係する出来事を綴ってくださいとすると、テーマが絞られますね。また大学の教員に対してあなたの学びが促進されたときを思い出して書いてくださいと言ってワークショップを

行ったこともあります。

【学生】個人活動はワークショップ内で原則行っているとのことでしたが、書くペースは個人差があると思います。学校現場で行う際、平均的にどれぐらいの時間が好ましいでしょうか。

【三田地】個人活動を横並びで行う目的は、個人のワークをやってこない人がいた時に対応に困らないようにするためです。宿題で個人ワークをやってきてもらうのもいいとは思いますが。みんなで同じことを並行遊びみたいにするという空間も悪くはないと思います。皆さんで個人作業の部分もアレンジしてやってみてください。

#### (8) ワークショップの根底にある「行動分析学」に関する本質的な問い

【学生】ヒトの行動の規定について、自然淘汰、過去の経験、文化淘汰が挙げられていました。もちろん、これらは個人の言動を形作る要因ですが、考え方や感じ方など表面に出てこない部分はまた違うのではないかと思います。同じような環境を辿ったとしても、生まれ持った心の在り方は人それぞれです。ですから、それぞれが持つ思考や感情が生む言動には差が出ると考えます。そうすると、ワーク中に「何故その人生上のイベントでそんな考えを持ったのか理解できない」ということが起こるのではないかと考えましたが、いかがでしょうか。

言動の根拠にその人の人生が関わるのであれば説明も可能でしょうが、ヒトの言動には境遇だけでは説明できない要素（元の

性格など）があると思います。実際経験したことがあるのですが、相手のこれまでを聞いた結果、「逆になんでこの人生を歩んでこの性格になったのか？」と理解に苦しむこともありました。そうすると、余計に関係性や理解に亀裂が走るのではと考えられます。

こういった「根本が遠い、いくら話を聴いても理解し合えず平行線を辿る」ような状態で、それでも良好な関係を築かなければならない時、どのように相手と接すればよいのでしょうか。私の経験上の出来事で、他者の経験が似ていても人生観が自分とは違うことがありました。それを聞いて関係に亀裂が入ることもあるのかなと感じました。

【三田地】よく読み込んでいただきました。亀裂が入ったなということに気づかれたということですね。

人と距離を置きたくなるのは悪いことではないと思います。もしカウンセラーを目指している方がいたら、気をつけた方がいいです。全て受け止めて受容することはできません。私はセラピストでしたので、カウンセラーに準ずるような訓練や仕事をしていました。患者さんやクライアントさんと会っていて合わない人とかいますね。でも合っているふりをする方が不誠実です。ただしプロなので、合っていないと自覚しながらプロフェッショナルにしっかりと付き合うのです。合わない気持ちに蓋をしてしまう方が良くないです。ただし他者の考え方や生き方が納得できないにもかかわらず、同意してしまうのはよくないです。すごく難しいですが、もし合わないと感じる人に出会ったら、合わないことに気づいている自分と向き合ってみてください。それをど

## 「みる」を問い直す

う相手に伝えるかは非常に高い言語能力が必要になると思います。

時に「あんなことやんなんてひどい人」と人の悪口を言う人がいますが、そこにあんなことと言っている人の価値観が見えています。これは自分の考え方がガラス張りに出てきている状態です。その人はそういうことをすることはひどいとラベル付けているのです。

最後に皆さんに覚えておいていただきたいのが、みんな赤ちゃんの時代を経て成長したということです。この時代から環境や日本に生まれた皆さんのお宅それぞれの家

の文化もあるわけです。私も自分の父親の癖が多く身に付いているような気がします。そういう中を経たのが今であって、どこか他者と違うところがあると自分の価値観と比べてしまいますが、それもその人の一つのあり方です。

教育に大事な行動分析学の視点、先程の問題行動に関するものですが、それも意味その問題行動を起こしている子どものヒストリーから見直すという大きな視点です。本日は皆さんどうもありがとうございました。

### 3. おわりに～改めて今、感じていること（三田地）～

今回、荒井先生が「ゲスト募集」の告知をされているのを知り、果敢にも応募させていただきました。いきなり授業に参加させていただくのは「場づくりの専門家」を標ぼうするファシリテーターとしては、無謀ですので、同業者であるファシリテーターの青木将幸（通称、青木マーキー）さんがゲストでいらしている回に参加させていただきました。

そこで受講されている学生さんから次々にエッジの効いた、つまり鋭い質問が出されているのを拝見し、「これは、私がいわゆる講義をするよりは、“対話”を中心に進めた方が意味ある場になりそうだ」と予感しました。

そういう経緯があって、対話の材料として私が行ってきた「ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ」の実践をまとめた論考を事前に読んで、かつ質問も事前に投げさせていただくという方法を取りました。今回、荒井先生にまとめていただいたこの原稿はそのような流れの中での授業記録ということになります。

率直な感想は、皆様非常に真摯に論文にも向き合ってください、かつ授業当日の対話も大変有意義であったというものです。さらにこのように記録としてまとめていただくとは当初は想像もしていなかったもので少々の驚きと共に、この授業を大事に思ってください荒井先生、そして学生の皆様に本当に感謝しております。

これからの社会にこのような誠実な若い皆様が旅立っていかれるということで、本当に心強く頼もしく思いました。この機会を与えてくださった荒井先生にも心より感謝申し上げます。

#### 文献

三田地真実 (2019). ライフヒストリー曼荼羅ワークショップ：他者を理解するということ、『三田哲学』第142号, 187-219.